

心理コーディネーターになるために Vol.18

山下桂永子

☆指導主事からの相談

ある朝、8 時 45 分からの教育センター職員朝礼が終わり、8 時 50 分からの相談員朝礼に向かおうとしたとき、教育相談担当の指導主事 A 先生から「山下さん、ちょっと相談があって、この後ってお時間ありますか？」と声をかけられる。私は「今からの相談員朝礼が終わった 9 時から 10 時まで空いていますよ」と返しなが、ちょっと嫌な予感がする。

指導主事から声がかかるときは、何かしら学校でトラブルが起きているか、教育相談の対応で、イレギュラーな動きを求められるかのどちらかである。緊急支援レベルの大事ではないことを祈りながら、相談員朝礼を終え、9 時から担当ケースの打ち合わせを予定していた相談員の B さんに「ごめん、ちょっと A 先生から話あるって言われてるので、少し時間遅れて大丈夫かな」と聞く。B さんは「全然大丈夫ですよ、今日は午前中余裕あるので」と慣れた様子で返してくれる。

心理指導員になって数年、最近は学校で起きた様々な事象に指導主事とともに対応することも増えている。相談員の方々も、私のイレギュラーな動きにはすっかり慣れてくださっているようで、私との打ち合わせの時間が急に取れなくなっても動じる様子はなく、「私は～時と～時が空いてるのでまた声かけてください」と温かく指導主事との話に送り出してくださる。



☆学校からの教育相談依頼

A 先生から話を聞くと、昨日 C 小学校の教頭から連絡が来て、「ある児童の対応に困っている。D くんは、小学 5 年生の男児。低学年のころから万引き、嘘をつく、友達の文具を盗んでゴミ箱に捨てるなどの問題行動がある。指導をしてもその場しのぎの反応が多く、謝っても数秒後には別の話をしている。高学年になって対人関係のトラブルが増え、友人関係も悪化。嘘の内容も巧妙になっており、周囲も振り回されてしまう。母親とも相談しながら指導を続けているが、状況はよくならない。スクールカウンセラーに見てもらったことがあり、発達課題があるかもしれない。学力は低く、授業中の手遊びが多い。できれば教育センター（の教育相談）を紹介したいと思っている」とのこと。

指導主事には、学校と教育センターがDくんについて情報共有をすることの許可を、できれば保護者に得たうえで、保護者に教育相談を勧めていただき、保護者から教育相談を申し込んでもらいたいとお願いすることにした。

☆学校との連携の始まり

その後、Dくんの保護者からは教育相談申し込みがあり、同時に学校からの連絡で、学校と教育センターとの連携について、Dくんの保護者の許可を得たとのことだったので、スクールカウンセラーに連絡をして、Dくんの様子を伺った。スクールカウンセラーの見立てとしては、「言葉のやりとりが要領を得ず、話を整理して伝えることができない。衝動性の高いところがあるようで、物を盗んだあとがどうなるかの見通しを持っておらず、盗んだ後にどうするか困って捨ててしまったりごまかして嘘をつくなどするよう」とのことだった。



☆Dくんの面接とアセスメント

Dくんとその保護者に教育センターへ何度か面接に来てもらい、その後発達検査を行った結果、Dくんの知的発達は境界域にあり、できない部分を隠そうとしたり、あいまいな理解で衝動的に応答してしまうことで、結果的に嘘になってしまうことが推測された。また、心理検査の結果からは、フラストレーション反応として他者を責めたり、ストレスをなかったことにするような反応が多く、多くの不安や不満を解決できないまま、ストレスをためこんでしまい、結果として物を盗むという行動が出ているのではないかと推測された。

☆学校への検査結果フィードバック

Dくんの検査結果は、保護者に説明し、保護者にも了承を得てその後学校担任、学年主任へフィードバックが行われた。相談員からはDくんが日常生活の中で、勉強や会話のやりとりがスムーズに理解できず、自信をなくしたりストレスをためやすいことなどを伝え、担任の先生からは「(嘘をつくのは)悪気がなくて状況がわかってないからなんですね」と今後、嘘をついたときや衝動的な言動の際には、言葉かけを具体的に丁寧に行うこと、宿題など忘れ物をしたときには確認しながら対応することを話されるなど、Dくんへの対応を話し合った。

☆連携の終わり

Dくんについての学校との情報交換は、その後、学期に1回程度行われ、Dくんの小学

校卒業まで続けられた。またDくんの中学校入学に合わせて中学校とも情報交換を行い、学校との定期的な連携はそこで一旦終了となった。



☆学校との連携の意義

学校との連携は近年増えているが、Dくんの保護者のように学校との連携をすぐに了承される保護者ばかりではなく、中には教育センターに相談していることについて、学校に知られたくないという場合もある。そういった場合は無理に連携をすすめることはせず、基本的に面接内容は守秘義務に守られているということを保護者にも子どもにも丁寧に伝えていく。

また、学校との連携は、Dくんのように、教育相談の面接が行われる前から始まることもあれば、教育相談面接がすすみ、発達検査が行われた後や、その他必要と思われたときに保護者の承諾を得て行われることもある。タイミングはそれぞれではあるが、すべてのケースが直接連携するわけではなく、多くは保護者が学校やその他医療などにつながっていくサポートを教育センターが行うことが多い。

教育センターが学校と連携を行うとき、その要の存在となるのが保護者である。検査結果を学校に伝えるときには、できるだけ書面の形を取り、まず保護者自身に学校に届けてもらうようにしている。そうすることで安易に教育センターが他機関と直接やり取りを重ねて、保護者の思いが取り残されてしまうことを防ぎ、保護者自身の理解を検査結果とともに学校に伝えてもらうことで、保護者と学校の連携が深まることを望むからである。

個人の学びや成長を尊重し、その子にあった支援を行う学校やそれを支えようとする教育相談の考えは、ともすれば「その子だけ甘やかしている」と誤解されてしまうことがある。そういったときに学校や保護者が「この子どもが抱える課題は〇〇で、これから必要なことは△△という力が身に着くことで、そのために必要な具体的な支援は□□である」という共通意識を持っていることで、「甘やかしているのではなく必要な支援である」と胸を張って子どもと関わるができる。その共通意識を生み出すものは子どもへの理解であり、他機関連携なのだと思う。

今後も保護者や学校の先生、教育相談員など子どもに関わる大人がチームとなって子どもを理解し、焦らずに子どもの成長を見守り、支えられるような連携を今後も探っていきたい。

